

現代的小学校教育の基本的な考えかた

瀬戸尊

たいへんむずかしい問題について書くように依頼されました。何から申上げてよいかわかりません。第一に現代的ということが気にかかります。いま、われわれが教育にたずさわっている以上、どこの学校でも、現代的であるわけで、古代的や、中世的というような傾向はないと考えられます。よく旧教育と新教育というコトバをききますが、教育学説の上でのことは別にいたしまして、全部新教育であるはずであります。

ところが、教育の現場をちょっと見てみますと、いろいろ難点があります。児童の自発的な活動を大いに助勢しようとしても、教室にあふれるような児童数であつて、教師がいくら理想にもえ立っていても一人ひとりの児童をよく理解して、その児童に合うようなよい経験を用意することがむずかしい場合もあります。し

たがって、いきおい以前のように講義式の教授や、教科書だけの講義というふうになっている実状もあるわけで、たまに、ひきまわしの上手な教師は、見た眼はよくとも、個々の児童をあまりのばしていなかったり、管理にやかましい教師は、ときには児童を萎縮させてしまつて、個性を活かす機会をなくしているようなことになつてしまいます。そればかりでなく、児童の背後にある父母の要求が強いために、心ならずも形式的な課題でその日を暮すというのさえあるのはたいへん遺憾なことであります。が、父母は、自分たちの小学校時代のことを追憶して、なるべくあの時と同じようにやってもらいたい、こうすれば必ずあなるはずだという考えの決め方をするのは、ごく自然でありましょう。

小学校入学の日から受験勉強的態勢で、教科の最高点数をねら

つて計画を立てている人もあります。学校では入学準備はしないときいて、町の塾に入れたり家庭教師を頼んだりして、長期にわたって準備をします。さながら学校は、点数の証明書を取得するところと考えるもさしつかえがないようにさえみえましよう。

もしこれに形容詞をつけて現代的というならば、理想もなにもなくなってしまうと考えるのであります。物をいうほどの人は、自分の子どもを、一高東大コースへと向けようとしてしましよう。しかし物いわぬ多くの人は、どんな考えでいるでしようか。極端な例かもしれませんが、特殊学級に編入したある児童の母親がきて、こんなことをいっていました。

「ほんとうに、いい学級にいられていただいて、うれしく思っています。いまでは、あの子も、よい友だちができて幸福そうです。からだを丈夫にして大きくしてやりたいと思います。そして、あの子には、何ができるかということを見つめています。中学校を出たらそうした仕事をみつけてやって、それに協力してやろうと思っています」と、いかにも安定した表情で話しました。

この声は、あきらめのようにも聞こえますが、けっしてそうではありません。子どもが理解できたよろこびでしょう。特殊学級にはいった機会に、子どものことがわかったのです。

いいかえれば、子どもが尊重されたのです。成績が悪いといっ

ては叱られたり、馬鹿あつかいされたり、点数がよいからといって有頂点になって、剛慢にさせられたりするのは、人間としての大切なものがめっちゃめっちゃにされてしまいます。徐々に、自分を太らせていくべき子どもにとって、その機会さえなくしてしまいうです。自主的な意欲さえ持つ暇もなくなるでしょう。

もし、現代的という文字を真面目に解釈するならば、一般的に児童が理解されると同時に、個々の児童がそれぞれに理解されることが、その一つに当ると考えられましよう。

しかし、教育は、理解の上にご立たねばなりません。それだけでは目標が出てきませんし、いったい小学校教育が成り立っていく基本的な作用の力を考えたことにもなりかねます。

ここでいよいよ基本的な考え方にふれていきたいと思えます。子どもは、父母の間に生れて、本能的な集団をつくります。ここでは、ごくむき出しの愛情に包まれて育つのですが、その間に人と人との関係が生じて、理解と尊重のない限り、調和した生活ができませんし、一個の独立すべき人間の素因に培われることがさまたげられるでしょう。

ところが、小学校一年生に入学してくる児童をみてみますと、親もとから離れたばかりのこととして、一般的な児童ではありませんが、個々についてよくみると種々まざまちな性格において、知能

において異った児童であることがわかります。

親と子の間に成りたつていた関係を、そのまま学校に持ちこむことはできなくなりました。わがままな子、ぶ遠慮な子、おとなしい子、ひっこみじあんの子（これは、どうしてよいのかわからないで大勢の中でまごまごしている子も含む）、いじわるな子、それらは、家庭では一応うまくいっていたのでしようが、学校という新しい大きな集団に入ってくると、はつきりしたようすを示してくるのでしよう。

ここが、学校という人工的な集団であつて、計画をもつた社会であつて、むき出しの愛情で育てていた子どもにとって大きな変化ともいえるのであります。いいかえれば自然な集団で育ったときの人と人の関係と、学校にきてからの人と人の関係とは少し調子がちがってくるのであります。

一年生から六年生へと成長するにしたがつて、学校における人と人との関係の作用が強く働いていることに気がつくし、それこそ実に大きい力であつて、学校でなくてはできないような形成力を持つているといえます。

よく、いわれることですが、学級担任の教師がとてもよいから、いつまでも受け持つていてもらいたいというのです。受け持ちを変えられたらといつて学級のPTAが校長のところへ談判にい

くといったようなこともきくのです。もちろん担任の教師いかによつて学級の児童の成長発達が偏るようなこともあります。それよりも、学級の子どものどうしの関係、学校における子どもどうしの関係に大きい関心を払わねばなりません。もちろん教師その人も関係の人間ですが。このように、教師を中心とした考え方を、もっと広げて考えることが、現代的ということばにふれるでしよう。

こう書くと、児童どうしの関係をたいへん重くみすぎて、教師との関係をあまり考えないようにこえますが、そうではありません。前にも述べたように教師が児童から離れてしまつて、ただ教授のことで、監督のことでだけタッチするようなことは、さらに現代的ではありません。直接に子どもたちとタッチする面を考えるばかりでなく、教師どうしの調和ということを重くみるのが大切です。よく、ひねくれた子どものことを考えるときに、あの子の家庭では、父親と母親が、うまくいっていないのだといったようなことを話してはようです。よい家庭から、よい子が育つのだとどうように、学校という集団でも、よい学校から、よい子どもが育つのです。そのよい学校の一ばん大切なことは、人的関係でしよう。教師と教師の関係がその根本に横わつてはいます。

さて、ここまでくれば、もう少し、つっこんでいくことにしま

しょう。それは、学校という人と人との関係の中に、PTAという人と人の関係のよい組織体の在り方を重視せねばなりません。

PTAは、父母と先生が、謙虚に自分たちの考えをのべあって、自身を向上していくことを忘れてしまつては困ります。個人的なわがままを押しついたり、寄付金を募集したり、数人の父母だけが役員ぶりを發揮するようでは困ります。学校はPTAを、人としての環境と考えたいのであります。

さらに、児童の家庭を包含する地域の人々の結びつきについておたがいが謙虚に、そして善意をもって子どもを自主的に育てようと努力しあわねばなりません。できれば、地域の人々の發意でこのような集りがほしいのですが、学校のサジエストによつて、PTAの地域組織とすることができましよう。しかも、当該学校の親と子による集りを拡大して、地域内のすべての少年少女、さらに青年をも組み込むようにします。

以上、あげたところの人々とその組織は、完全に児童をよりよく育成するために、自分たちもよくなろうと努力する機構であります。

小学校教育の基本的な考え方をのべるのに、なぜこんなに子どもをめぐる人々の関係を重視して、任意ぶかく組みあげたのでしょうか。わたくしたちは、児童をどう観るかを決めてかかる必要

があります。児童は、日に日に育っています。児童自身は、より広い社会に仲間入りしていこうと努力しているようです。この努力を、理解し、育成していくのが教育の方針です。特に小学校では、幼児から少年への過渡期に当る時です。これに対してじゅうぶんな理解と、望ましい人と人の関係を組立ててやる必要があります。小学校には八教科があつてそれぞれに専門的な目標が立っているのですが、それは、あくまで学問的なものではないでしよう。個々の児童が自主的になつて、より大きい社会に適應するために必要な知識であり技能であつて、個人が一定の知識技能を暗記修得すればよいものではありません。集団の中で、互に作用しながら修得していくところに小学校教育の特質があるので、そこで人間としての育成も約束されるのであります。講義一ぺん倒や、管理主義の指導が現代的でないと思えるのは、この基本的な考え方からでくるからであります。

このように考えてきますと、さきほどい、いろいろ論議されている道徳教育は、いまさら一教科としてみたり、一週に一度の話し合いといったようなことではなく、小学校の教育そのものは道徳教育なのではないでしようか。

たいへん、ことばのたりない述べ方になってしまいましたが、このへんで筆をおくことにします。(東京都文京区立駒本小学校長)